



の有無に読み替えることができる。Fassi Fehri (1993: 27–34) は、アラビア語の VSO 語順と SVO 語順との交替を、(4) と同様の主語の上昇によって説明している。スペイン語の語順交替を (4) のように一般化することで、スペイン語型の語順交替を、アラビア語型のそれと体系的に比較することができる。Alexiadou & Anagnostopoulou (1998) や Gutiérrez-Bravo (2002: 1–4) は、スペイン語型の SVO/VSO 言語と、ケルト諸語やアラビア語のような VSO 言語との語順の違いを、主語前置の条件の差に帰着させている。

この仮説の傍証として、SVO 語順と動詞初頭語順、とりわけ VSO 語順との類型論的親和性が挙げられる。SVO 言語と動詞初頭言語は、ともに「VO 言語」として、共通した傾向（前置詞の使用、関係節・副詞的従属節の後置など）を示す (Dryer 1991)。また、SVO・VSO 間の語順変化が通言語的に自然であることも指摘されている (Gell-Mann & Ruhlen 2011)。中国語のいわゆる「存現文」のように、構文単位では VS 語順を呈する SVO 言語も多い。

## 1.2 スペイン語の動詞前位置

こうした視点に立った場合のスペイン語の動詞前主語の位置について、生成文法と機能文法の双方から、興味深い指摘がなされている。Zubizarreta ([1995] 1998: 100–105) は、スペイン語の SVO 構文で主語が置かれる位置が、(5a) のように他の要素によって占められる場合もあることを指摘している。さらに、この位置には複数の句が同時に置かれることはなく、動詞の前に 2 つ以上の句が置かれる場合は、動詞直前の要素以外を、休止（コンマで示す）などで明示的に主題化する必要がある (5b)。

- (5) a. *Ayer presentó María su renuncia.*  
 昨日 提示する.PRET.3SG マリア 3SGP 辞職
- b. *Ayer, María presentó su renuncia.*  
 昨日 マリア 提示する.PRET.3SG 3SGP 辞職  
 「昨日マリアは辞表を提出した」 (Zubizarreta [1995] 1998: 101–102)

このことは、スペイン語の動詞前主語位置が、句を 1 つだけ置くことができる一種の統語的スロットであることを示唆している。Zubizarreta ([1995] 1998) は、スペイン語の文の基本構造を XVSO (XPVSO) と規定している。一方、Martínez Caro (2009) も同様の観察に基づき、Dik (1997) に倣って、この X にあたる位置を P1 と呼んでいる。これらのモデルは、スペイン語が基底では動詞初頭語順をもつという第 1.1 節の仮説と本質的に同じものである。

## 2 ナワトル語イシュキワカン方言の語順

次に、発表者が調査している、ナワトル語イシュキワカン方言の語順現象を概観する。言語類型論において、いわゆる平均的ヨーロッパ語 (Standard Average European) の一部と見なされがちなスペイン語と、複統合的 (polysynthetic) で非階層構造的 (nonconfigurational) と目されることの多いアメリカ先住民語のナワトル語は、一見対照的だが、以下に報告するイシュキワカン方言の語順現象は、スペイン語のそれと多くの点で共通している。

なお、本発表では、「語順」の議論の対象を、原則的に並べ替え可能な、音韻語・句レベルの要素（動詞語・名詞句など）に限る。ナワトル語の人称接辞や、スペイン語の接語代名詞の位置は問題としない。

### 2.1 形態統語論的概要

ナワトル語 (Nahuatl: *náhuatl, mexicano*) は、ユート・アステカ語族に属するナワ語派の大部分を占めるメソアメリカ先住民語の 1 つで、約 165 万人によって話されている (2020 年国勢調査)。発表者の調査しているイシュキワカン方言 (Ixquihuacan Nahuatl) は、このうち西プエブラ山地 (西シエラ) 方言 (ISO 639-3: *nhi*) の一変種である。

ナワトル語は主要部標示型の言語で、たとえば動詞節では、主語・目的語の人称・数が、動詞語に人称接辞の形で標示される。音形をもつ名詞句としての主語・目的語は必須ではなく、動詞単独で文を作ることでもできる。明示的な名詞句項の有無にかかわらず、人称接辞は義務的で、決して脱落しない。また、名詞句は格標示をもたない。

- (6) a. *Nehwātl ni-k-mānilowa n tix-tli.*  
 1SG 1SGS-3SGO-かき混ぜる DEF 生地-ABS.SG

「私は生地をこねる」

(*Trabajo de tortillería*)

- b. *Ni-k-mānilowa.*

1SGS-3SGO-かき混ぜる

「私はそれをかき混ぜる・こねる」

## 2.2 SVO 語順と非 SVO 現象

ナワトル語では、多くの情報が接辞や抱合などの形態論的手段で符号化される一方で、語順などの統語的要素の果たす役割は相対的に小さいと考えられてきた。これに対し、イシュキワカン方言では、語順が明確な機能をもつ。

同方言では、他動詞文・自動詞文ともに SV(O) 語順が支配的で、*Tlēn panōtok?* 「何が起こっていますか?」のような質問への定立的 (thetic) な答えは、主にこの語順で現れる。特に他動詞文では SVO 語順への選好が強く、(8) のように OVS 語順と解釈するのが語用論的に自然と思われる文でも、文脈なしで提示された場合、SVO 解釈が選ばれる。

- (7) *N Gabryēl Ø-ki-chihchīw-tok n tlakwal.*  
 DEF ガブリエル 3S-3SGO-整える-DUR DEF 食べ物

「ガブリエルが食事を作っている」

- (8) *N Pēdroh ō-Ø-ki-titik n ī-tskwih.*  
 DEF ペドロ PST-3S-3SGO-噛む.PRET DEF 3SGP-犬.POS.SG

「ペドロが彼の犬を噛んだ」(? 「彼の犬がペドロを噛んだ」)

しかし、上記の観察をもってイシュキワカン方言を純粋な SVO 言語とすることはできない。まず、適切な文脈が示された場合、(9) のような OVS 語順も現れる。また、存在や出現の動詞など、主語が新情報や焦点を担う場合、(10) のような VS 語順が圧倒的に優勢となる。さらに、従属節では (11) のように動詞初頭語順が現れやすくなる。

- (9) *N āxah n itskwin-tli Ø-ki-kūwiya-h n sērahokwilimeh.*  
 DEF 今 DEF 犬-ABS.SG 3S-3SGO-追いかける-PLS DEF 蜂.ABS.PL

(犬が蜂の巣に向かって吠えた) 「すると、蜂たちが犬を追いかける」

(*Frog Story*)

- (10) *Pēroh ompa ō-Ø-katka sē awaka-būwi-tl.*  
 しかし そこ PST-3S-ある.PRET 1つ アボカド-木-ABS.SG

「さて、そこに 1 本のアボカドの木があった」

(*Siete fundadores*)

- (11) ... *porkéh ō-Ø-ki-tsilīnih-keh n siwā-meh*  
 なぜなら PST-3S-3SGO-鳴らす-PRET.PLS DEF 女-ABS.PL

「(女性が撞いてはいけないという鐘を) 女性たちが鳴らしたから」

(*Iglesia de Ixquihuacan*)

## 2.3 動詞前位置の制約

また、次のような制約がある。VSO・VOS・OVS 語順は、適切な文脈が与えられれば許容される場合があるのに対し、(12a) のような SOV・OSV 語順は一貫して許されない。ただし、(12a) のような SOV 語順でも、(12b) のように主語と目的語の間に休止 (コンマで示す) を置いて明示的に主題化すれば、境界的ながら許容される。

- (12) a. ?*N Lupītah san sē tamal ō-Ø-ki-kwah.*  
 DEF ルピータ …だけ 1つ タマル PST-3S-3SGO-食べる.PRET

「ルピータはタマル (伝統料理) を 1 つだけ食べた」

- b. *N Lupītah, san sē tamal ōkikwah.*

このように、SVO・VSO・VOS・OVS 語順が許されるのに対し、SOV・OSV 語順は許されず、しかも第一要素を明示的に主題化すれば許容度が上がるという観察事実は、次のように一般化できる。

(13) 動詞直前の位置には、主題化された要素を別にすれば、主語または目的語を1つしか置くことができない。

### 3 考察

#### 3.1 スペイン語とイシュキワカン方言の共通点

ここまでの議論で、イシュキワカン方言において、多くの場合に SVO 語順が無標であること、構文や文脈によっては SVO 以外の語順が許容され、また好まれる場合があること、動詞の前に主語と目的語の両方を置くことができないという、談話的要因からは説明困難な語順制約があることを見た。第1節で概観したスペイン語の語順現象と、第2節で報告したイシュキワカン方言の語順現象を見比べると、両言語には次のような共通点が見いだせる。

- (i) SVO 語順が、最頻かつ主節・平叙文の無標な語順であること
- (ii) SVO 語順と動詞初頭語順との体系的な交替が見られること
- (iii) 動詞の前には主語以外の句も置くことができ、かつ複数の句を同時に置くことはできないこと<sup>1</sup>

そこで、本発表では、第1節で概観したような XVSO 構造が、イシュキワカン方言にも存在すると主張する。この仮説により、上記 (iii) のような語順制約を説明できるだけでなく、従属節や存在動詞について観察されるような VS 語順に関しても、「なぜ主語が前置されないのか」という、より具体的な問いを立てることができる。

なお、上記のようなイシュキワカン方言とスペイン語の類似が、言語普遍性に由来するものではなく、単に両言語の長期にわたる接触の結果である可能性は排除できない。しかし、次節で見るように、植民地初期のナワトル語でも似た語順交替が見つかっており、接触前のナワトル語の姿も、現代ナワトル語と似ていた可能性が高い。

#### 3.2 ナワトル語諸方言への適用

古典ナワトル語をはじめとする他のナワトル語諸方言にも、上記の「XVSO 仮説」が適用可能であることを示唆する事実が見ついている。一般にナワトル語が述語初頭語順を原則とし、動詞前主語は主題化の結果であるという見解は、比較的広く受け入れられている (Launey 1979: 24, 38, 1994: 40, Hill & Hill 2004, Pharaoh Hansen 2010)。また、基本語順についての観察結果は、方言・研究者ごとにまちまちで、統一見解がないが、「XVSO 仮説」によって、その多様性を体系的に整理できる。諸方言の語順についての主な見解を次に示す (方言名は略す。★は古典ナワトル語)。

- (i) SVO 語順: Brockway (1979), MacSwan (1998), de la Cruz Cruz (2010), etc.
- (ii) 述語初頭語順: Beller & Beller (1979), ★Launey (1979), ★Sullivan (2018), etc.
- (iii) 分裂語順 (SVO/VS/VO): ★Steele (1976), Tuggy (1979), Sischo (1979), etc.
- (iv) その他 (談話要因など): ★Andrews (2003), Pharaoh Hansen (2010), Flores Nájera (2019), etc.

この相違の一部は方言差に由来すると思われるが、同じ語順交替現象の異なる側面を切り取っている可能性もある。「XVSO 仮説」では、上記の観察結果の差を、主語前置という単一の視点に還元して検証することができる。

#### 3.3 MoVIL という類型

ここまで、スペイン語とナワトル語がよく似た語順交替をもつことを指摘した。両言語は、基底では動詞初頭語順をもちながら、実際には主語の前置により SVO 語順をとることの多い、「控えめな動詞初頭言語」である。本節では、この「控えめな動詞初頭言語」(moderately verb-initial language: MoVIL) が、世界の言語のなかで珍しくない存在であること、この概念が、従来「自由語順」とされてきた言語の語順現象の具体的理解に資することを主張したい。

<sup>1</sup>厳密には、イシュキワカン方言では、(9) のように動詞前主語よりも前に時や場所などの副詞句を置くことができ、その際、必ずしも韻律的な主題性の明示を必要としない。ナワトル語の副詞的要素や文頭小辞には接語化していると思われる例もあり、その詳しい性質は明らかでない。

### 3.3.1 関連する指摘

MoVIL に相当する概念は目新しいものではない。メソアメリカ先住民語学に限っても、Aissen (1992, 1999) はマヤ諸語について、López Nicolás (2016) はサポテク語について、それぞれ動詞前に「XVSO 仮説」で想定されるような排他的な統語的位置が存在することを指摘している。また、スペイン語に似た語順交替をもつ言語は、ポルトガル語 (Costa 1998) や現代ギリシア語 (Alexiadou & Anagnostopoulou 1998) など、ヨーロッパを中心に多く報告されており、これを Alexiadou & Anagnostopoulou (1998: 493) は「SVO/VSO 交替をもち明示的虚辞をもたない言語」と呼んでいる。Dryer (2013) は、VSO/SVO が交替する言語が多く存在することから、これを一類型とみなしている。

### 3.3.2 MoVIL 概念の応用可能性

MoVIL にあたる存在が、記述言語学・言語類型論・比較統語論の各分野ですでに知られているにもかかわらず、あえて本発表でこの類型を強調するのは、この概念を分野横断的に可視化することが、世界の言語の語順現象のより深い理解につながると考えるためである。たとえば、マヤ諸語では、Steele (1976) が古典ナワトル語について報告したものと似た分裂語順がしばしば観察される (England 1991, Gutiérrez-Bravo & Manforte y Madera 2010, etc.)。オーストロネシア語族やアフロ・アジア語族など、動詞初頭語順と SVO 語順が混在する地域・系統においては、MoVIL が一類型として、または遷移段階として現れることが期待される。また、アラビア語型の VSO/SVO 交替や、中国語の「存現文」のような固定語順言語内の交替も、MoVIL との関連において位置づけなおすことができる。

## 3.4 外的主題と内的主題

ここまでの議論で、スペイン語とナワトル語の文がともに XVSO 型の動詞初頭構造をもつこと、この種の言語が MoVIL という一類型をなすことを主張した。残る問題は、基底に動詞初頭語順をもつ MoVIL において、なぜ主語の前置が無標な操作として起こるのかという動機の説明である。この点についてはさらなる検討が必要であるものの、本節では、主にイシュキワカン方言のデータをもとに、「内的主題」(internal topic) と「テーマ・レーマの分極化」(theme-rheme polarization) というキーワードを用いて、機能的立場から暫定的な説明を提示したい。

Aissen (1992) は、マヤ諸語の主題の統語位置が言語間で異なることを指摘し、これを「外的主題」・「内的主題」と呼んだ。本発表では、これを同一言語内の異なる統語位置を指すものとして採用する。外的主題は、典型的な主題化要素が転置される文頭位置である。一方、MoVIL における無標の SVO 構文の主語位置を「内的主題」と考える。(14) の例では、*nōn tōrreh* 「その塔」が外的主題、*n ikampānah* 「その鐘」が内的主題にあたる。

- (14) *Wan tōs nōn tōrreh, esteh n ī-kampānah ō-Ø-īx-tlapah* ...  
 そして FIL その 塔 FIL DEF 3SGP-鐘 PST-3S-面-壊れる.PRET  
 「そして、その鐘楼は、鐘がひび割れてしまった」 (Iglesia de Ixquihuacan)

Fassi Fehri (1993) や Zubizarreta ([1995] 1998) は、ここでいう内的主題が典型的な「主題」とは異なることを指摘している。ナワトル語の場合、外的主題は休止によって標示されることが多いが、内的主題はそうではない。また、定立的な文が SVO 語順で現れる傾向からも分かる通り、内的主題には新情報や不定名詞句が現れることもある。また、外的主題と異なり、内的主題に現れる要素は圧倒的に主語が多い。内的主題と外的主題の主な違いを表 1 に示す。

### 3.5 なぜ SVO 語順が無標なのか

表 1 のような典型的な主題性からの乖離にもかかわらず、本発表で SVO 構文の主語位置を「内的主題」と呼ぶのは、この位置が主題性・テーマ性と結びついた談話的性質（軽い主題性）をもっているためである。たとえば、第 2.2 節で指摘したように、存在文など、主語が焦点になる場合には SV 語順は現れにくい。

表 1 内的主題と外的主題の主な違い

	内的主題	外的主題
統語位置	低	高
典型的に主語	○	×
典型的に定	×	○
休止による標示	随意的	○
中立的文脈で可	○	×

定立的な文で、新情報である主語が「軽い主題性」を受ける理由については、Contreras (1976: 74, 97) の議論が示唆的である。同論文では、スペイン語における談話的要因と語順との関係を論じるなかで、レーマ性の程度が近い要素同士が線形的にも隣接する場合に、文の容認度が下がることを指摘している。また、動詞の後に共にレーマ的な2つの要素が並んだ場合に、一方を前置する規則 (Rheme Splitting) を提案している。この議論を機能主義的に言い替えれば、スペイン語には、情報構造の上で一様な節を避け、テーマ・レーマの非対称性を作り出す規則が働いているといえる。また、やや趣意は異なるものの、野田 (1994: 50) は、スペイン語の一部の SVO 構文が、日本語の有題文と同様に「文を主題の部分とそれ以外の部分の2つから構成される構造にするために」生じると述べている。

本発表では、上記の議論を敷衍し、MoVIL の定立的文における主語前置は、情報構造の平板化を防ぎ、発話にテーマ・レーマ構造をもたらすために起こるという解釈を提案する。自然言語では、旧情報を伝える主題と、新情報を伝える評言に分かれた文がもっとも典型的な文であり、聞き手による解釈の負荷も小さいと考えられる。だとすれば、主語と目的語の両方が新情報である場合、一方を擬似的に主題化して内的主題の位置に置き、形式上でテーマとレーマを分極化させることで、情報提示の平滑化を図ることができる。本発表では、この働きを、MoVIL における主語前置 (主語の内的主題化) の主な動機であると主張したい。イシュキワカン方言において、主節では SVO 語順への選好が強く、従属節では動詞初頭語順の許容度が高いのも、従属節の解釈においては主節の情報が利用できるために、解釈しやすい情報提示をする動機が相対的に弱いためであると解釈できる。

## 4 結論

本発表では、スペイン語とナワトル語イシュキワカン方言の語順現象を比較し、SVO 語順と動詞初頭語順との体系的な交替の存在を示した。また、関連する生成文法・言語類型論・メソアメリカ記述言語学の諸分野にわたる成果を概観し、語順交替のタイプの1つとして、「控えめな動詞初頭言語」(MoVIL) という分類を提示した。最後に、この種の言語で主語の前置が無標であることの説明として、内的主題化によるテーマとレーマの分極化を提案した。

MoVIL にあたる類型は、従来、記述言語学・言語類型論・比較統語論の各分野で個別に議論されてきたもので、なんら新奇なものではないが、この概念が諸現象を結びつける共通項として再認識されることで、これまで「自由語順」として等閑に付されてきた諸言語の隠れた語順現象に対する、より具体的な検証が可能になるものと考えている。

## グロス略号

1 一人称; 2 二人称; 3 三人称; ABS 独立形; DEF 定冠詞; DUR 継続相; FIL フィラー; INF 不定詞; O 目的語; P 所有者; PL 複数; POS 被所有形; PST 過去; PRET 完了過去 (点過去); S 主語; SG 単数  
1/2/3、SG/PL、S/O/P は互いに組み合わせて用いる (例: 3SGO = 三人称単数目的語)。

## 引用文献

- Aissen, Judith L. 1992. Topic and focus in Mayan. *Language* 68(1):43–80.
- Aissen, Judith. 1999. External possessor and logical subject in Tz'utujil. In D. L. Payne & I. Barshi, eds., *External Possession*, pages 167–193. Amsterdam: John Benjamins.
- Alexiadou, Artemis & Elena Anagnostopoulou. 1998. Parametrizing AGR: Word order, V-movement and EPP-checking. *Natural Language and Linguistic Theory* 16(3):491–539.
- Andrews, J. Richard. 2003. *Introduction to Classical Nahuatl*. Norman: University of Oklahoma Press, revised ed.
- Beller, Richard & Patricia Beller. 1979. Huasteca Nahuatl. In Langacker (1979), pages 199–306.
- Brockway, Earl. 1979. North Puebla Nahuatl. In Langacker (1979), pages 141–198.
- Contreras, Heles. 1976. *A Theory of Word Order with Special Reference to Spanish*. Amsterdam: North-Holland.
- Costa, João. 1998. *Word Order Variation: A Constraint-Based Approach*. Ph.D. thesis, University of Leiden.
- de la Cruz Cruz, Victoriano. 2010. *Las cláusulas relativas en el náhuatl de Teposteco, Chicontepepec, Veracruz*. Master's

- thesis, CIESAS.
- Dik, Simon C. 1997. *The Theory of Functional Grammar, Part 1: The Structure of the Clause*. Mouton de Gruyter.
- Dryer, Matthew S. 1991. SVO languages and the OV:VO typology. *Journal of Linguistics* 27(2):443–482.
- Dryer, Matthew S. 2013. Order of subject, object and verb. In M. S. Dryer & M. Haspelmath, eds., *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <http://wals.info/chapter/81>.
- England, Nora C. 1991. Changes in basic word order in Mayan languages. *International Journal of American Linguistics* 57:446–486.
- Fassi Fehri, Abdelkader. 1993. *Issues in the Structure of Arabic Clauses and Words*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Flores Nájera, Lucero. 2019. *La gramática de la cláusula simple en el náhuatl de Tlaxcala*. Ph.D. thesis, CIESAS.
- Gell-Mann, Murray & Merritt Ruhlen. 2011. The origin and evolution of word order. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 108(42):17290–17295.
- Greenberg, Joseph H. 1963. Some universals of grammar with particular reference to the order of the meaningful elements. In *Universals of Language*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Gutiérrez-Bravo, Rodrigo. 2002. *Structural Markedness and Syntactic Structure: A Study of Word Order and Left Periphery in Mexican Spanish*. Ph.D. thesis, University of California, Santa Cruz.
- Gutiérrez-Bravo, Rodrigo & Jorge Manforte y Madera. 2010. On the nature of word order in yucatec maya. In J. Camacho, R. Gutiérrez-Bravo, & L. Sánchez, eds., *Information Structure in Indigenous Languages of the Americas: Syntactic Approaches*, pages 139–170. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Hill, Jane H. & Kenneth C. Hill. 2004. Word order type change and the penetration of Spanish *de* in modern Nahuatl. *Sprachtypologie und Universalienforschung* 57(1):23–48.
- Langacker, Ronald W., ed. 1979. *Studies in Uto-Aztecan Grammar, Volume 2: Modern Aztec Grammatical Sketches*. Dallas: Summer Institute of Linguistics, University of Texas.
- Launey, Michel. 1979. *Introduction à la langue et à la littérature aztèques, Tome 1 : Grammaire*. Paris: L'Harmattan.
- Launey, Michel. 1994. *Une grammaire omniprédicative : Essai sur la morphosyntaxe de nahuatl classique*. Paris: CNRS Éditions.
- López Nicolás, Oscar. 2016. *Estudios de la fonología y gramática del zapoteco de Zochina*. Ph.D. thesis, CIESAS.
- MacSwan, Jeff. 1998. The argument status of NPs in Southeast Puebla Nahuatl: Comments on *The Polysynthesis Parameter*. *Southwest Journal of Linguistics* 17(2):101–114.
- Martínez Caro, Elena. 2009. Constituent order in Spanish: A Functional Grammar perspective. In M. Carretero, L. Hidalgo, J. Lavid, E. Martínez Caro, J. Neff, S. Pérez de Ayala, & E. Sánchez-Pardo, eds., *A Pleasure of Life in Words: A Festschrift for Angela Downing.*, vol. I, pages 187–213. Madrid: Universidad Complutense de Madrid.
- 野田尚史. 1994. 「日本語とスペイン語の主題化」 『言語研究』 105:32–53.
- Pharao Hansen, Magnus. 2010. Polysynthesis in Hueyapan Nahuatl: The status of noun phrases, basic word order, and other concerns. *Anthropological Linguistics* 52(1):274–299.
- Sasaki, Mitsuya. 2021. *Configurationality in Ixquihuacan Nahuatl*. Ph.D. thesis, University of Tokyo.
- Sischo, William R. 1979. Michoacán Nahuatl. In Langacker (1979), pages 307–380.
- Steele, Susan M. 1976. A law of order: Word order change in Classical Aztec. *International Journal of American Linguistics* 42(1):31–45.
- Sullivan, John. 2018. Continuity and change in Nahuatl word order. Presentation at Northwestern Group of Nahuatl Scholars, Yale University, May 12, 2018.
- Tuggy, David H. 1979. Tetelcingo Nahuatl. In Langacker (1979), pages 1–140.
- Zagona, Karen. 2002. *The syntax of Spanish*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Zubizarreta, Maria Luisa. [1995] 1998. *Prosody, Focus, and Word Order*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.